

(一)、世界遺産への懷疑から

- ・世界遺産とは何か
- ・誰が、何を、「人類の未来へと残すべき遺産」と認定するのか

(二)、東北遺産は可能か

- ・かけがえのない風景とは何か
- ・「何もない空間」から「詩的な場所」へ

(三)、宮沢賢治、イーハトヴとは何か

- ・宮沢賢治／イーハトヴとは何であったのか
 - ①記憶の掘り起こし
 - ②土地の名付け
 - ③物語の創造

(四)、地域の内発的発展のために

- ・地域学と内発的発展論
- ・地域学の多様性のなかで
小さな地域学／大きな地域学
- ・地域学と観光の接点から
- ・地域学とは、
その地域に生きる人びとが、地域の歴史や文化や風土を掘り起こし、探求し、それを地域資源として、地域の将来イメージを創造してゆくための、だれもが参加できる知の運動であり、地域づくりの運動である……

(五)、あらためて、地域とは何か

- ・なお拠るべき故郷はあるか
- ・郷土／地方／地域
地域／八〇年代以降、地域という言葉が浮上、時代のキーワードへ
地域学の登場、平成の市町村合併のなかで
- ・故郷の発見、という逆説

(六)、定住の時代の終わりに

- ・ 縄文以来の「定住の時代」が終焉を迎えつつある
- ・ 移動や旅の日常化のなかで
中心の争奪戦から、中心（定点）の複数化へ

(七)、故郷と異郷のはざまに

- ・ ローカル／ナショナル／グローバルという構図
- ・ 折口信夫は半島の思想家である
柳田国男と折口信夫、どちらが思想として生き延びるか……
- ・ サイド『オリエンタリズム』
「世界のあらゆる場所を故郷と思えるようになった人間は、それなりの人物である。だがそれにもまして完璧なのは、全世界のいたるところが異郷であると悟った人間なのである」
異郷に生きる、または複数の故郷に生きること、ときに異邦人として……
- ・ 花田清輝の書評／「故郷を失わぬ人々——宮本常一『庶民の発見』」から
「ここには、故郷を失っていない人びとの幸福と不幸とがある」
「わたしは、同じ問題が、故郷を失っている人びとによっても——どこへ行っても異郷しか「発見」できない人びとによってもとりあげられることを希望したい」
「近代をこえるためには、一度、われわれは、徹底した「異邦人」になる必要があるのではなかろうか」
- ・ 伊波普猷／＜汝の足元を深く掘れ、そこに泉あり＞